

やはりおれがライダー
の力でSAOを攻略するの
はまちがっている

あなべべさんじゅうなな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『あなたのやり方、嫌いだよ。』

『人の気持ち、もっと考えてよ。』

修学旅行の一件で奉仕部2人に拒絶された八幡。

その後出来た友達とVRMMORPG ソードアートオンラインをプレイすることになる。

そこでゲームドライバーを手に入れ、アインクラッド攻略に励む。

どうもあなべべです。

俺ガイル×SAOです

仮面ライダーは設定だけ使用します。

あと、流石に強すぎるのでだいぶ弱く設定しています。

文才はないですが、よろしくお願いいたします

注1 平成、令和ライダーだけです。昭和ライダーは出ません。

注2 作者は響鬼、剣、アマゾンズは未視聴のため出ません。

目次

プロローグ

拒絶と友達

1

生徒会選挙　そして

10

アインクラッド

リンク・スタート

21

現実世界　　妹と魔王と真実

37

選択

47

1層フロアボス攻略会議

51

プロローグ

拒絶と友達

『あなたのやり方、嫌いだよ。』

『人の気持ち考えてよ。』

修学旅行の一件で、あいつらに拒絶されて一月がたった。

あれ以来、奉仕部には顔を出していない。

雪ノ下と由比ヶ浜ともあれ以来接触がないので俺は奉仕部には必要ないんだろう。

正確には修学旅行から帰った翌日は顔を出そうと部室には向かったのだが、

『ヒッキー今日来るのかな？』

『あんな男、この部には必要ないわ。』

『そうだよ。あんなことする理由がわかんないし。』

部室の前で二人の会話を聞いてしまい、その日はそのまま帰宅した。

昼休み、いつも通りベストプレイスにて小町お手製の弁当を食べていると、いきなりある人物から声をかけられた。

「あ、ヒキタニくんいたつしよ。」

昼休み入ったらすぐどつかいっただから探したつしよ。」

「ん？どうした戸部？」

俺は今、妹が作ってくれた弁当食べるのに忙しいんだが。」

「それは悪かったつしよ。」

ちよつとヒキタニくんに用があつてさ。」

放課後少しでいいから時間くれない？」

二人きりで話したいことあるし。」

「は？なんだよ話つて。」

まあ別に構わねえけど。」

「サンキューつしよ。」

じゃあ、帰りのHR終わったら駐輪場で待つてるつしよ。」

これ以上昼の邪魔しちゃ悪いからもういくべ。」

戸部が俺と話したいこと。

まあ十中八九、海老名さんとの事だろ。

ただ、あれからもう1ヶ月はたつ。

あの告白について文句を言いたいのだとしたら遅すぎる。

放課後

駐輪場に向かうともう戸部が待っていた。

「悪いな。遅くなった。」

「いや、そんなことないべ。」

俺もついたばっかだったし。」

そして戸部に連れられ近くのサイゼに入った。

わかってんな戸部のやつ。千葉といたらサイゼだよな。

「で、話したいことってなんだよ。」

「いやあもしちがったらめっちゃ恥ずかしいし、ヒキタニくんにも悪いんだけどさ。」

うん。

ヒキタニくんって本当に海老名さんのこと好きなん？」

「どうゆう意味だ？」

「あれだべ？修学旅行から帰って来てからヒキタニくんのこと結構見てたっしょ。」

「だけほとんど海老名さんのこと見てなかったし、今思うと海老名さんに振られた後もあんま落ち込んでる様子じゃなかったっしょ。」

「それ考えてたら、あの告白も好意でしたんじゃないやなくて、なんか俺が振られるのを防いでくれたんじゃないやね？」ってなってもうわけがわかんなくなってるさ。」

「もうヒキタニくんに直接聞いたほうが早いべって感じっしょ。」

「お、おう。」

「俺が海老名さんのことを恋愛感情で見えていないことは本当だ。」

「ただ、なんで告白したかは言えない。」

「やっぱそうだったっしょー。」

「でもどうしても理由は言えない感じ？」

「ああ。それを言ったらあのいら……」

「やべっ口がすべった。」

「やっぱ奉仕部への依頼だったかあ。」

「すまん。今のは聞かなかったことにしてほしい。」

「ならその依頼について全部教えてくれたら聞かなかったことにするっしょ。」

「はあ。」

戸部どうしても聞きたいのか？

聞いたら間違いない後悔するぞ。」

「大丈夫っしょ。」

一応当事者だべ俺？

それに聞いたら、全部聞かなかったことにする約束だしよ。」

「わかったよ。全く。」

お前と葉山が奉仕部に依頼にきた次の日、奉仕部に海老名さんと葉山が来たんだよ。

依頼内容は修学旅行で男子同士のイチヤイチャがみたい、とかゆうふざけた内容だった。

よく考えてもみろ。

普段そこまで絡みがない俺。

違うクラスの雪ノ下。

同じグループである由比ヶ浜。

この3人にそんな依頼する必要がないだろ。

それに依頼内容を言った海老名さんはこつちをまじまじと見てくるし、葉山は苦虫を

嘔み潰したような顔をしていた。

それみて海老名さんの本当の依頼がわかった。」

「それってまさか。」

「ああ。お前の想像通りだとおもうぞ。

男子同士でつるまして、戸部と二人きりになることを、いやストレートに言えば戸部に告白させないようにするのが本当の依頼だったわけだ。

まあ雪ノ下と由比ヶ浜は気づいてなかった、いや今でも気づいてないだろうがな。」

「そのあと葉山に別で話を聞いたが、まあ俺の考えた通りだったわけだ。

直接言うのは若干心苦しい感はあるが、あのとき海老名さんはお前が告白してきそうなのをわかっていた上で受け入れる気がなかった。

それで告白したお前と振った海老名、

この2人が同じグループにいればその関係がぶつ壊れると思った海老名さんと葉山は奉仕部に告白をさせないように依頼したわけだ。

海老名さんは友達である由比ヶ浜がいるからそんな回りくどい依頼をして、葉山はその件での保険みたいなことをかけてきたわけだ。」

「…隼人くんの保険ってなんだべ?」

「……もし依頼が失敗してお前が振られたとする。

それであるグループが崩壊したとする。

それを奉仕部のせいにしてしまえばいい。

奉仕部が余計なことをしたから戸部は振られた。そのせいでグループの仲が微妙になっってしまった。

原因を外に作ってしまえば元に戻せるとでも思ってたんだろ。」

「正直、お前らのグループがどうなるうと知ったこっちゃなかった。

でももし俺がなにもせずについて葉山の思い通りになったとしたら、俺だけじゃなくて雪ノ下や由比ヶ浜まで被害を受けていた。

俺がなにもしなかったせいであるの2人に被害が及ぶのは我慢ならなかった。

だからお前の感情を無視してあんなことをしたってわけだ。

海老名さんも俺の考えがわかったのか、『今は誰とも付き合う気がない。』って返事をしてお前にそのまま告白させるのを防いだわけだ。」

「どうだ？胸糞悪いだろ。」

なんせ登場人物全員がバカとクズで自分勝手なやつしかいないんだからな。

だからお前は俺を許さなくてもいい。

殴る蹴るにしたって受け入れる。

それくらいのことではした自覚はある。

学校で噂になってるとおり俺は最低の人間だからな。

ただ、あのグループとは今まで通りでいて欲しい。

それが依頼だったからな。」

「そつかあ。隼人くんは俺が振られるのは知ってたのかあ。

やつべ。思った以上にシヨックがでかいべ。

でもヒキタニくんには怒ってはないべ。

奉仕部のためとはいえ、俺らのために動いてくれてたんしよ？

それに、ヒキタニくん最近奉仕部顔出してないべ？

俺らの問題のせいで奉仕部の仲が微妙なのが俺自身が許せないつしよ。

本当に悪かったつしよ。」

「お、おい謝んな。

べ、別にお前のせいってわけじゃねえつての。

あれは俺がやり方を間違えたからであつてお前のせいじゃない。

だからお前が気にするようなことじゃない。」

「やつぱヒキタニくんめっちゃ優しいつしよ。

ヒキタニくん俺と友達になるべ？

とりあえず連絡先交換するべ。」

は？なぜ俺が優しいとか思ってるの？

お前の感情を踏みにじった男だぞ？

まじでリア充の考えわかんねえ。

「お、おう。」

とりあえず携帯出して戸部に渡す。

「やり方わかんないから頼むわ。」

「了解だべ。」

なんかきづいたら戸部と友達になっており、連絡先を交換してしまった。

「あ、そうだ。ヒキタニくんまだ時間大丈夫だべ？」

この後、ちよつとサツカー部の後輩から相談受けてんだけど一緒に聞いてくくんない？

ここの支払いは全部払うから頼むっしょ。」

「あ、ああ。別に構わねえよ。」

10分後

「どーもお待たせしました。戸部先輩。」

生徒会選挙　そして

「どーもお待たせしました。戸部先輩。」

亜麻色の髪の子が近づいてきた。

「お、おい戸部？」

サッカー部の後輩って話だったけど？

女子が来るなんて聞いて聞いてねえぞ。」

戸部に耳打ちで尋ねる。

「ん？だからサッカー部のマネージャーの後輩だべ？」

とりあえず紹介するべ。

こつちがサッカー部の後輩のいろはす。

んで俺の友達のヒキタニくんな。

ヒキタニくんもいろはすの相談に乗ってくれるってゆうからいいっしょ？」

「どーもー。一年の一色いろはです。」

「つす。比企谷八幡でしゅ。」

やっちまったよ。

黒歴史確定だよ、こんちきしょー。

「あれ？ヒキガヤくんだったんだ？」

「ずっとヒキタニくんだと思ってたべ。」

「ん？どっちだつていいよ。」

「名前覚えられるほうがすくねえしな。」

「やつぱこいつ素で間違えてたんだな。」

「まあヒキタニくんと呼ばれるのも慣れたし。」

「えっと、一色さんだっけか？」

「どうする？俺には話しづらいなら帰るけど？」

「いえ、全然大丈夫ですよー。戸部先輩だけだと頼りないですし。」

「いや、戸部に対する扱いひでーな、おい。」

「今度、生徒会の選挙あるじゃないですかあー。」

「……（以下略）」

一色の相談はクラスの女子からの嫌がらせで生徒会長に勝手に立候補させられ、あげく他に立候補する相手もいなくこのままだと生徒会長にさせられるから、それを自分に

傷がつかない方法で回避したいということだった。

とりあえずなにかいい方法がないか考えとくつて話で解散となった。

「たでーまー。」

「おかえり、お兄ちゃん。」

「およ？ どうしたの？ なんか機嫌いいね、なんかあつたの？」

「ん？ そうか？」

「まあなんかいろいろあつて友達できた？ みたいなの？」

「なんで疑問系なのさ。」

「それって女の子？ 可愛い？」

「なんで女子だと思うんだよ。俺だぞ？」

「すごい説得力あるね、その言葉。」

「そういえば、あれ届いてたよ。ナーヴギアとソードアートオンライン。」

「受験終わったら小町にもやらしてね。」

「おう。まじで来週末が楽しみだ。」

そう、来週末の土曜日、待ちに待ったソードアートオンラインの正式サービスが開始されるのだ。

ただ、その前に他の問題を解決しときたい。
一色の選挙の問題だ。

まあ2つほどもう案は出ているんだが、どうすつかなあ。

プルルル プルルル

ん？電話？それも知らない番号から？

「はい、もしもし？」

『ひゃつはろー、雪ノ下陽乃だよ。』

「雪ノ下さん、なんで俺の番号しつてんすか？」

『細かいことは気にしない気にしない。』

それより比企谷くんに聞きたい事と手伝って欲しいことがあってね。

比企谷くん最近奉仕部に顔出してないみたいだけどうしたの？』

なんでしつてんだよ、この魔王。

「どこで知ったかしりませんが、部長であるあなたの妹から、あなたは必要ない。もう来て欲しくないって言われたんすよ。」

『……修学旅行でなにかあったの?』

「はあ、修学旅行である依頼がありまして、それで俺がとった行動が気に入らなかつたようです。」

『……一つ聞きたいんだけど、その依頼で雪乃ちゃんとガハマちゃんは何かしたの?』

「……………」

『はあ、もう雪乃ちゃんたちにはがっかりだよ。』

どうせその依頼受けたのだから比企谷くんじゃないんでしょ?

なのに自分たちはなにもしないで行動をおこした比企谷くんを否定するとかあり得ないでしょ。

ごめんね比企谷。姉として謝らせて。』

「い、いえ。俺の行動も酷かったんで。」

それに……姉である雪ノ下さんに言う話ではないですけど、あいつらとは本物の関係になれると思ってましたけど、どうやら違ったみたいです。

あいつらに変な希望を抱いて俺が悪かったんですよ。

雪ノ下さんが謝ることじゃないです。」

『ごめんね、ありがと比企谷くん。』

「で、手伝って欲しいことってなんですか？

俺が力になれるかわかんないですけど。」

『今日ね、めぐりから電話で相談受けたんだけどね、生徒会選挙でなんかトラブルがあったらしくてさ。』

「ああ、会長に立候補したのが一年で、それもクラスのやつに勝手に立候補させられたつてやつですか？」

『話が早いね、もう噂とかになってるの？』

「いえ、その、と、友達経由で本人から相談受けました。」

『そうゆうことね。』

めぐりとしては、そんなイジメみたいなことされた子に会長やらせるのは可哀想だし、

やる気もない子にはやらせたくない感じみたい

それで今日奉仕部にいつて依頼してきたそうなの。

そして、雪乃ちゃんとガハマちゃんふたりとも生徒会長に立候補するみたいだね。』

「そうゆうことですか。」

でもそれなら依頼は解決したんじゃないですか？

あいつらのネームバリューがあれば負けるほうが難しい。」

『選挙だけを考えればね。』

ふたりのどちらかが会長になったこと想像できる?』

「まあひどいことになるでしょうね。」

雪ノ下は文化祭の二の舞で周りが誰もついてこないでしょう。

由比ヶ浜はアホですからね。」

『でしょ?』

比企谷くんは何かい案ない?』

「あいつらが立候補するとなるとハードルがあがるんですが一応ありますよ。」

一色を説得して、やる気を出してもらおうですよ。

一色が生徒会長になるメリットは有り余るほどにある。

逆にこのまま一色が選挙でまけた時のリスクがでかすぎる。

まだ年だし不慣れなことがあっても城廻先輩をはじめとした人たちでフォローすればいい。

ただ、さっき言った通り選挙相手が雪ノ下たちだと、選挙に勝つのがネックですけどね。」

『流石、比企谷くんだね。』

じゃあその方法でいこうか。

あ、めぐりはもちろんだけど、私も手伝うからね。』

次の日

城廻先輩と雪ノ下さん、いや陽乃さんと俺で一色をどうにか説得できた。

戸部、戸塚、材木座、小町にも協力してもらえらることになり、一色は無事生徒会長に就任することになった。

放課後、その一色陣営のメンバーで祝勝会をやることに。

もちろんサイゼで。

「ひゃっはろー、比企谷くん、おつかれ。

やっぱ比企谷くんに頼んで正解だったなあ。」

「お疲れ様です。

いやいや、陽乃さんだってあれくらいの案なら浮かぶでしょ。」

「どうだろうね。

まあ、一色ちゃんがやる気を出すのが一番いいのはすぐ思い浮かんだけどね、隼人を

だしにしてやる気を出させるのはうかばなかったかな？

正直、やる気を出させるのが一番キツいかなって思ってたからね。そつからあとはどうにでもなるでしょ？

じゃあご褒美に土曜日私とデートしよつか？」

「うえ？」

すみません。今週末はちよつと用事がありまひて。」

噛みすぎだろ俺。

つか、うえ？つてなんだよ気持ち悪い。

「ふーん。お姉さんとのデートより大事な用事なんだあ？」

「い、いえ、数ヶ月前から楽しみにしていたゲームが土曜日から始まるんですよ。」

「あー、ソードアートオンラインだっけ？」

比企谷くんあれやるんだ。

私もやってみよっかな。」

「お？比企谷くんもSAOやるん？」

「お、おう。」

ん？もっ？」

「俺も抽選一万人通ったべ。」

たしかいろはすも買えたんだべ？」

「はいっ。向こうで会えたらよろしくです。」

「うーん。私も買えたけど始めるのは受験おわってからかな？」

「いやいやいや、一万個しか販売しないうえにその上その中の百はβテストだろ？俺の周り運がいいなあ、まあ俺も買えてるんだけどさ。」

「へえー、みんなやるんだ。」

「私もどうにか手に入れてみようかな。」

「あー、陽乃さん。もう販売してないですよ？」

「」

「げ、限定一万個の販売だったんで。」

「……………」

ヤバいこの空気。

「めぐり。」

「は、はい？な、なんですはるさん？」

「受験終わるまででいいから貸して。」

「わ、わかりました。か、貸しますから、貸しますから元気出してください。」

「そーいや戸塚と材木座はどうなんだ？」

「僕と材木座くんは買えなかったんだ。」

「うむ。剣豪将軍の力を見せるときだと思ったのだが。」

なんだとっ。この中で四人が買えてんのに戸塚がいない、だと。

「だから、次新しいVRMMORPG出たら一緒にやろうね八幡。」

それにゲームの話もいっぱい聞かせてね。」

アインクラッド

リンク・スタート

待ちに待ったこの日、ソードアート・オンラインの正式サービス開始日だ。

戸部と、あと最初は嫌がっていたが一緒にやる友達がいなくしぶしぶ一緒にやることにした一色と3人で合流する予定だ。

陽乃さんは城廻先輩の予備校の帰りに受けとるようなので少し遅れるそうだ。

「小町ー。7時くらいに一回落ちる予定だから、ばんめしよろしく。」

「はいはい。楽しんできてね、お兄ちゃん。」

あ、小町的にポイントたかい。」

あと3分

やべえ、ドキドキしてきた。

あと2分

あー。今さらだけど俺のキャラ変じやないかな？
一色とかに笑われないよね？

あと1分

やべえ。テンションフォルテシモー。

こんなの俺のキャラじゃない。

1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

「リンクスタート」

「とりあえず2人と合流か。」

鏡を見ずとも自分の顔がにやけてるのがわかる。

ただ、現実と違って眼も腐ってないし、中々のイケメンキャラだし通報されないよね？

えーっと、戸部のやつキャラネームがカケルだったよな？
で一色がイロハ。

本名そのままだから覚えやすくて助かる。

とりあえず約束していた広場に着いたわけだが……
人多いなっ。

この中から2人を探せとか無理ゲーだろ？

どんなアバターかもわかんねえし。

何か目印的な決めときや良かった。

「ハチー。いろはーす。何処にいるっしょー？」

あんのバカ。

十中八九戸部のバカじゃねえか。

恥ずかしくて近づきたくないぞ。

それにあいつ、ここでも一色のことはいろはすなのね。
でもこれ以上騒がれる前に行きますかね。

「うるせえよ。お前カケルか？」

「ん？つてことはハチだべ？」

いやあ、合流つても2人の見た目もわかんねえし、目印とかも決めてなかったからこ
うするのが一番早いべ？」

いや、そうなんだけだよ。

あとは一色か。

「えつとお。戸部先輩と先輩ですよね？」

「おついろはすー。」

いろはすのアバターめっちゃかわいいっしょー。」

一色も合流したか。

つか一色のやつ、戸部のこと普通にリアルネームで呼びやがったな。

あと、もしかして俺の名前覚えてないのかしら？

「お、おいイロハ。」

「ちよつ。なんですか？いきなり名前呼びですか？

そんないきなり彼氏面されても迷惑です。」

正直、先輩のアバターはカッコいいと思わなくはないですが、リアルあの目とかほんつとに無理なんでごめんなさい。」

ん？なんかよくわかんないうちに振られたよ。」

「ちげえよバカ。」

一応ゲームの中なんだから、リアルネームは出さないほうがいいってゆう忠告だよ。」

お前のキャラネームが普通に名前だからいけねえんだろが。」

「あつそうゆうことでしたか。」

了解です。気をつけます。」

「んでどうするべ？」

「まあ、せつかくソードアートとか剣の世界なんだろうし、例のソードスキルとやらを試したい。」

「そうですね。じゃあとりあえず村の外行ってみます？」

「その前に装備整えようぜ。」

「つか何の武器も持ってねえじゃん俺ら。」

とりあえず武器屋にいき装備を整え、街の外に出てみた。

「ちよつ、おい、い、一色。」

「後ろのアレなんとかしろよ。」

「は？先輩？ ハア リツ、リアルツネームでっ ハア呼ぶなっていったの先輩じゃないですかー。」

街を出てみると、猪っぽいモンスターが目視できる範囲でも数匹は確認できた。

「ソードスキル使えるようになったらあの猪で試してみるか？」

「は？何いつてんのハチタニくん。」

「せつかくのゲームなんだべ？実践あるのみっしょ。なあいろはす。」

「そうですよ。それにモンスター相手の方が緊張感ってゆうか火事場の馬鹿力みたいな感じで使えるようになるかもしれないじゃないですかあ。」

2人に押しきられ、実践開始。

「よっしや、まず俺からいくべ？」

こんな感じだべ？ ーっしよ。」

カケルはチュートリアルに書いてある感じに剣を振ってみたが、別段特殊なことも起こらず猪に剣が当たって弾かれた。

.....。

「あ、あれ？失敗した感じだべ？」

「お、おう。始まる前に観た動画だとソードスキル使うと剣が光るみたいだからな。」

「カケル先輩ダサいです。」

つかそれよりもなんかあの猪興奮してね？

なんかとてつもなく嫌な予感。

「お、おいモンスターから目を離すな。」

後ろで覗いていた俺らを見て、恥ずかしがるカケル。

「ちよつ、カケル先輩後ろつ。」

「へ？」

ドシーン

後ろから突進されてカケルが吹っ飛ぶ。

……………。

「お、おいイロハ？」

「せ、先輩？」

「そ、そだ。次は先輩の番ですよ？」

「……………」グイグイ

「ちよつ、無言で押し付けるの止めてくださいよ。」

「セクハラって訴えますよ？」

「よし、イロハ。」

逃げよう。出直そう。

うん。これは戦略的撤退だ。」

「そ、そうですね。」

でも、あの猪さんめちやくちや興奮してませんか？」

「だ、大丈夫だ。」

いざとなつたら隣の可愛い後輩が犠牲になってくれるみたいだかな。」

「隣の可愛い後輩？」

……。

それって私のことじゃないですかあ。

そこは『俺が盾になってやる。』とか『俺に任せろ。』ってゆうシーンじゃないんですか？」

「ばっかお前、そんなこと俺がやってもキモいだけだろ。」

そんなコント染みたことをしていたら猪も痺れをきらしたのか突進してきた。

2人でフィールドを逃げ回っていると、近くにいた他の猪モンスターからのタゲまで拾ってしまい気づけば三匹に追われていた。

ちなみに、カケルのやろうはまだ倒れていた。

こんな初期モンスターにワンキルレベルの攻撃力があるとは思えないので確実に死んだふりしてやがる。

後で覚えとけよ。

「おい、イロハ。

むこうにいる2人組まで逃げて押し付けよう。

うん、それがいい。」

少し離れたところで男2人が猪一匹相手に戦っているのが見えた。

剣がチカチカ光ってるのが見えたのでソードスキルが使える、俺たちよりも上級者だろう。

「そ、そうですね。ハア、あそこまでなら頑張れます。」

「よし、イロハ。」

お前のその持ち前のあざとさを全開にして助けを請うんだ。」

「こんなつ、息がつ、切れた状態で、できるわけないじゃないですか。」

それよりもつ、ゲームの中なのに息つ、切れるんですね。」

「そうだな。」

なんでつ、休みの日にこんな疲れてんだって話だわ。

まあいい。このまま押し付けるか。」

「なあキリトよお。」

あの2人こつち向かって来てねえ?」

「そうだな。めちやくちや嫌な予感するんだが。」

クライン。一応剣構えとけよ。2人の後ろにフレンジーボアが三匹追っかけてきて

る。」

「マジかよ?」

「さつきようやく一匹倒せたのによ。」
「しようがないか。」

クライン、あの2人が通りすぎたら右側のやつを頼む。

あとの二匹は任せろ。」

「よっしゃあ。」

あの女の子めちやくちや可愛いしここでいいとこ見せれば。」

あの2人に押し付けるのが成功して、振り返ってみると三匹中、二匹が倒されていた。
もう一匹もバンダナのやつが倒すところだった。

「ふう、助かったわ。」

イロハ、とりあえず謝りにいくか。流石に悪いことした。
ついでに戦いかたとかレクチャーしてくれるかもしれないな。」

「あー、すみません。」

なんかモンスター押し付けちゃって。」

「おうっ。気にすんな。」

俺はクラインってんだ。んでこっちがキリトだ。」

「キリトだ。よろしく。」

もしかしてあんたらもソードスキルの使い方わからない感じだったりするのかわ？」

「そうなんですよお。」

あつ、私はイロハつていいいます。よろしくです。」

「あー。俺はハチだ。よろしく。」

であそこで死んだ振りかましてるクソソヤロウがカケルだ。

ソードスキルとかいうやつを試してみようぜつてやつてみたらあのザマつてわけだ。

もしよければなんかコツとかレクチャーしてもらえないか？」

「ああ。べつに別にいいぜ。」

ちようどクラインにも教えてるところだしな。」

死んだ振りしていたカケルも合流してキリトからソードスキルの使い方や戦闘のコツとかを教えてもらった。

「じゃあ、俺はそろそろ落ちるわ。」

もうすぐ宅配ピザが届くからな。キリト、ホントにサンキューな。3人もまたよろしく頼むわ。

「ってかあれ？ログアウトってどこにあんだ？」

「メニュー一覧にあるだろ。」

「ん？あれ？おかしいな、ログアウトボタンが……ない。」

「は？ログアウトボタンがないだと？」

「マジか。俺のにもない。」

「えっ、じゃあどうやってログアウトしてるんですか？」

「私もそろそろ一度戻りたいんですけど。」

「無いんだ。」

「は？？」

「中から他にログアウトする方法はないんだ。」

「あるとするならば、現実世界で誰かにナーヴギアを外してもらうぐらいだったと思う。」

「クライアント、GMコールしてみてください。」

「こっちでもうやってるぞ。だが繋がらない。」

「おかしい。」

正式サービス開始からもう二時間ちよいは経っている。

俺たちより早くログアウトしようとした人たちもいたはずだ。

なのにまだGMからなにも通知が来ない。

本来ならこんなバグが見つかり次第、全プレイヤー強制ログアウトして、緊急メンテナンスでもなければおかしい。

ログアウトできないとゆうのはかなりの問題だ。

俺やカケル、イロハ、あとキリトとそうらしいが、実家からプレイしているから最悪夜には家族の誰かがナーヴギアを外してくれればどうにかなる。

だがクラインのように一人暮らしの場合は最悪だ。

誰もナーヴギアを外してくれないのだ。

システムが直るまでこの世界から脱け出すことができないのだ。

つまり、クラインのピザはどんどん冷えていくのだ。

すると、全員の身体が光だした。

「おつ、強制ログアウトだべ？」

あーよかったっしょ。」

「……違うつ。これは転移だ。」

キリトが言い切ると同時にはじまりの街の広場に飛ばされた。

w a r n i n g w a r n i n g

警告音が鳴ったら広場の上空に赤黒いローブを着た男が浮いていた。

『プレイヤーの諸君。

私の世界へようこそ。』

現実世界

妹と魔王と真実

現実 小町 side

最近、お兄ちゃんの周りがガラッと変わった。

あれだけ苦手と言っていた陽乃さんとも親しくしているし、お兄ちゃんの事を親友とまで言ってくれている戸部さん、

それにいろはさんまで。

さらに雪乃さんや結衣さんとの話を全く聞かないのだ。

修学旅行でやはり何かあったのだろうか？

帰ってきたときのお兄ちゃんの目の腐りようはすごかった。

何かあったの？って聞いてみたけど、『落ち着いたら話す。今は待つてくれ。』と言われた以来聞けていない。

うーん。今さらだけどもちやくちや気になる。

陽乃さんなら知ってるかな？

よし聞いてみようかな。

プルルル プルルル

『ひゃっはろー。どうしたの？小町ちゃん。』

「あ、どーもです。陽乃さん。

すみません。今からって時間あります？」

『うーん。比企谷くんと約束した時間まではまだあるし大丈夫だよ。』

そうだった。陽乃さんもSAOやるんだった。

「だったらうちに来ませんか？」

ちよつと陽乃さんに聞きたいことがありまして。

それに、うちでゲームにログインしませんか？

終わったら3人で晩御飯一緒にたべませんか？」

『いいの？じゃあ小町ちゃんの好意に甘えちゃうね。』

じゃあここからなら十分ちよいかね、それくらいで着くとおもうよ。』

「わかりましたー。お待ちしてますね。」

ピンポン

「陽乃さん、お待ちしてましたー。」

「さき、中にどうぞ。」

「ひゃっはろー小町ちゃん。」

「お邪魔します。」

「で、早速だけど、私に聞きたいことってなにかな？」

「あの一。お兄ちゃんと奉仕部のことです。」

修学旅行から帰ってきてから奉仕部に顔出してないみたいですし、いろはさんの選挙のことも敵対してみたいですし、何かあったのかなあって、で、陽乃さんならなにか知ってるんじゃないかな？と思ひまして。」

「まあ、やっぱそのことだよねー。」

正直、聞かないほうがいいかもよ。

うーん。でも小町ちゃんは聞いとくべきかもだけど。

すっごい胸糞悪い話だからね。

まあ、私も当事者ではないから全て知ってる訳ではないんだけど、比企谷くんや戸部くんからの話だと、雪乃ちゃんやガハマちゃんに失望するよ。」

「それでも構いません。」

お兄ちゃんは『お前は気にするな。』って何も教えてくれないし…でも、今まで雪乃さんや結衣さんにもお世話になつていたので…

小町だけ何も教えてもらえない、子供扱いされるのは嫌なんです。」「小町ちゃんの覚悟は伝わったよ。

じゃあ奉仕部で何があつたか説明していくね。

まあ一番のきつかけは修学旅行かな。

修学旅行前にとある依頼が奉仕部に来たそうなのよ。

その内容がね……………

…（中略）

……………それで相反する依頼を比企谷くんが1人で解消しちゃった訳。

正直、私でもここまでふざけた状況を全て丸く解決なんてできないよ。

それに、比企谷くんが動かなかつたら、戸部くんは間違いなく振られていた。

それで隼人のグループは崩壊していたと思う。

それを隼人は奉仕部のせいにするつもりだったんだと思う。

雪乃ちゃんやガハマちゃんはそこまでわかつてない…いやわかろうとしてないから

ね。

よくそんなんで比企谷くんがしてくれた結果を罵倒できたもんだと感心するよ。

2人は今までの奉仕部の活動も自分たちの成果って思ってるだろうけど、ぶっちゃけほぼ全部比企谷くんが1人で動いて、1人で泥被って結果を残してて、2人はその美味しいとこだけさらってってるだけ。

それで2人から拒絶された比企谷くんは奉仕部から離れたわけ。

そこでいろはちゃんの生徒会長の件で比企谷くんvs雪乃ちゃん、ガハマちゃんの構図になって、順当に比企谷くんが勝利しているはちゃんが生徒会長になったってわけ。

それで比企谷くんはいろはちゃんを生徒会長にした責任ってことで副会長に、そして事情を全部知った戸部くんはサッカー部辞めて比企谷くんと一緒に生徒会に入ったのね。

とりあえず大雑把に説明するとかんな感じかな？」

「…ありがとうございます、陽乃さん。」

そんな事があつたんですね。」

♪♪

「あ、すいません。ちよつとお母さんから電話きました。

あ、もしもしお母さんどうしたの？」

『小町？八幡あのゲームやっちゃった？』

まだやってなかったら急いで止めて!!

さつきから八幡に電話通じないの』

「え？どうしたの？もうお兄ちゃんはゲームやってるよ？」

夕方には1回戻ってくるって言ってたけど。」

『嘘……そんな……』

小町、シヨック受けないでね…

今家よね？とりあえずテレビつけて…』

「どうしたのさお母さん。」

とりあえずテレビをつけてみた。

〃ソードアート・オンラインとゆうナーヴギアのゲームをプレイした人達がゲーム内に閉じ込められています

ゲーム内で死亡したり、無理矢理ナーヴギアを外そうとするとナーヴギアによって脳が焼き切れて死亡します”

「え……な、なにこれ……嘘……」

「小町ちゃん、落ち着いて。」

ちよつと電話貸して。」

「すみません。横から失礼します。

私、八幡さんと小町さん

の友人の雪ノ下陽乃と申します。

小町ちゃんは今とても動揺してて会話できる状態ではないので変わりました。

八幡くんは残念ながらもうソードアート・オンラインをプレイしています…

もし、万が一の事を考えたら、小町ちゃんに見せる訳にはいけないので私が八幡くんの様子を見に行つてきます。」

『すみません、お心使いありがとうございます。』

「お願いできるでしょうか。』

「お待たせしました。」

八幡くんは幸い無事でした。

ニュースで、ソードアート・オンラインをプレイしてる人は病院に搬送するよう出ていますのでこちらの方で手配してもよろしいでしょうか？」

『ああ、良かった…ほんと良かった…』

雪ノ下さん、本当にありがとうございます。

私も旦那もすぐに帰ります。』

Side Haruno

こんなことになってるなんて……………

とりあえず比企谷くんは無事…

とりあえず都築に電話だ。

「もしもし、都築？」

大至急比企谷くんの家に来て。

それと病院にSAO患者4人分の部屋取っておいて。」

次にやることは…比企谷くんと一緒にやるって言ってたいろはちゃんと戸部くんの無事を確認しないと。

「あ、もしもし静ちゃん？」

大至急、一色いろはちゃんと戸部翔くんの緊急連絡先と住所教えて。

いいから早く。説明してる時間ないのよっ!!」

ふう、とりあえずいろはちゃんと戸部くんの無事も確認できた。

後は……

「小町ちゃん、落ち着いて聞いて。」

比企谷くんは無事だったわ。

今からうちの都築が来るから一緒に病院に向かつて。」

「えっ？あ、は、はい。」

わかりました。

陽乃さんはどうするんですか？」

「……………私は今からS A Oに行つてくる。」

少しでも比企谷くんたちのためになるだろうからね…………」

「そんなんっ!!」

ダメですっ!!それに陽乃さんがいくなら小町も…………」

「小町ちゃん。」

比企谷くんは死ぬかもしれない場所に小町ちゃんが来て喜ぶと思う？

それに小町ちゃんがいたら比企谷くんは絶対無茶をする。

それに今、ナーヴギアとS A Oは1セットしかないの…………

小町ちゃんは比企谷くんや私が帰つてくるのを病院で待つて欲しいの。わかつて

くれる?。」

「ぐすっ…………わかりました。」

絶対に陽乃さんも帰ってきてくださいね。」

小町ちゃんの部屋を借りてナーヴギアをセットする。
初期設定が終わり、後はスタートするだけだ。

「親不孝な娘でごめんね、お母さんお父さん。

リンク・スタート」

選択

茅場晶彦と名乗る男からの説明が終わる。

要約すると、

- ・ログアウト機能がなし
- ・100層クリア時にログアウトできる
- ・ゲーム内で死亡すると、現実世界の身体もナーヴギアによって死亡する

…おいおいマジかよ。

なかなか洒落になってねえぞ……

1ヶ月のベータテストでも10階層まで届かなかったって噂だ。

死亡有りきのトライエラーできてその結果だと、正直お先真つ暗だ。100層クリアなど何年かかるか想像もしたくない。

「えっ？ちよ、ちよつと待ってくださいよ…

え？か、帰れないんですか？

そんなの聞いてないですよっ!!」

「落ち着けつ、イロハ！」

頼む。1回落ち着いてくれ。」

なんとかイロハはパニック状態からは脱してくれた。

カケルも内心冷静ではないだろうが、正気を保つてくれていた。

「キリト、お前は今の話どう思った？ ナーヴギアで本当に人を殺すことは可能なのか？」

ナーヴギアで人を殺す事なんか可能なのか等キリトに確認してみた。

「あ、ああ。いや、うん。」

確証はないぞ。

でもナーヴギアにはそれが出来るくらいのパッケージは搭載されていたはずだ…

それよりも、今は早くここを離れた方がいい。

この様子じゃすぐに暴動が起きるぞ。」

「お前は どうするんだ、この後？」

「俺は次の街に進もうと思う。」

出来れば、ハチやクラインたちも着いてきてくれると嬉しい。」

「お前がいいなら俺たちはお前について行く。」

このゲームについて俺たちは何も知らないからな。

右も左もわからない俺たちだけだと……死ぬのも時間の問題だ。

イロハとカケルもそれでいいか？」

イロハとカケルも頷く。

「クラインさんはどうしますか？」

「おいおいハチ公、いくら容姿が変わったって今まで通りで構わねえよ。いきなりそんな他人行儀じゃ悲しいぜ。」

すまねえな。俺は別ゲームで知り合った奴らと合流する予定なんだ。そいつらの事は見捨てられねえ。

気にしないで先に行つててくれや。」

「すまない、クライン……」

「だから気にすんなくて。」

キリトよお、お前よく見たら可愛らしい顔してんのな。

イロハちゃん、アバターより全然可愛いね。

このゲームクリアできて向こうに帰れたらデートしてくれない？」

「セクハラで通報します……」

「いやなんでだよっ!!」

クラインのおかげでイロハとカケルにも笑顔が戻ってきた。

「クライン、また会おうな。」

「当たり前よ。」

次会った時にはイロハちゃんにデートのk貰うからな！」

そしてクラインに見送られて次の町に向かった。

1層フロアボス攻略会議

第1層フロアボス攻略会議

俺とキリト、イロハ、カケルの4人で参加した。

この約1ヶ月、マジでいろいろあった。

このゲームからログアウトできなくなったり、

4人でレベリング&装備の素材集めしたり、

どこぞのプレイヤーにMPKされかかったり…

あのMPK未遂は正直、マジで死ぬかと思った。

もし1人だったら間違いなく死んだ。

あの野郎、絶対許さないリストに入れようかと思ったけど、自分で起こしときながら巻き込まれて死んでた……

まあ、そんなこんなで結構レベルもあがった。

そんな中、攻略会議が開催されると聞き、参加することにした。

「はい、じゃあそろそろ始めさせてもらいまーす。

今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう。

まず、俺の名前はディアベル。職業は気持的にナイトやっています。」
なにあいつ……あのノリついていけないんだけど……

「今日、俺たちのパーティがああ塔の最上階でボスの部屋を発見した。

俺たちはボスを倒し、第2層へ到達し、このデスゲームをいつかクリアできると、はじまりの街で待っている皆に伝えなければならぬ。

それが、今ここにいる俺たちの義務なんだ。そうだろ、みんな。」

「それでは、まずは6人でパーティを組んでもらいたい。」

6人だ……と……

俺たちは4人……あと2人も必要なのか……

いや、そもそもキリトは俺たちと組んでくれるよな？

勧誘にしても、俺は戦力外だ。

今までボツチだった俺には知らない奴に声かけるとかハードル高すぎる。

ただ、ここにはコミュニケーションお化けのカケルに、女子受けは悪いが男子受けはいいイロハがいる。

幸い、このゲームは男の比率が高いから大丈夫か。

「ハ、ハチ、」

「キ、キリト、俺らと組んでくれるよ…な？」

「よ、よかった…」

いや、こつちこそよかった…

キリト、信じてたぜ。いや、涙目になるなよキリト笑。
気持ちは分かるけども。

だが、あと2人…

まあ最悪4人でいいか…

「センパイ、1人連れてきました！」

いいですよね！」

イロハがフードを被った人物を連れてきた。

いや、イロハよ、行動早いな。

「ん、ああ。こつちは問題ない。」

いいよな？キリト。

むしろ、そっちが俺たちとでいいのか？」

頷いてくれたので、パーテイ申請を送る。

ええと、名前はつと…Asunaか。

「ハチだ、よろしく。」

「カケルだべ、よろしくつしよー！」

「キリト、よろしく。」

「…よろしく。」

イロハは自己紹介していたようだ。

「ちよお待ってんか。

俺はキバオウってもんや。

ボスと戦う前に言わせてもらいたいことがある。」

え？なにあいつ？

え？髪型やばくね？もしかしてリアルもあの髪型？

どうゆうカットすればあんなトゲトゲになんの？

あの髪型で真面目な顔すんなよ、完全出オチキャラじゃねえか。

こちとら笑いをこらえるので精一杯だよ。

「まず、今まで死んでった2000人に詫びいれなければならん奴らおるはずや。」

「キバオウさん、君が言いたいのは元ベータテスターの人達のこと、かな？」

「決まってるやないか。」

そいつらに土下座さして、溜め込んだ金やアイテムを吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし、預かれん。」

おいおい、ふざけた頭してるせいか、ふざけたこと言い始めやがった。

流石、出オチのネタ担当。

ダメだ、もう笑いが我慢できねえ

「ぶふっ。」

「ちよ、センパイ。」

「そこのお前、何笑ってんのや。」

やっちまったぜ。うわーめんどくせー。

「いや、すまん。」

いきなり、ふざけた頭が真面目な話を喋りだしたかと思いきや、ふざけた内容すぎて

な。

場を和ませようとしたコントだろ？

もう、笑いは充分だ。ディアベルさん、攻略会議に戻ってくれ。」

キバオウは顔を真っ赤にしてプルプルしてる。

どうしたんだ？笑いが取れて嬉しいのかな？

「笑い話ちゃうわ。」

「こっちは真面目に言つとるんや。」

え？マジ？

冗談じゃないの？

「ボス攻略会議って聞いてきたけどさ、

少しでも戦力が欲しい状況で、ベータテスターの戦力を削ぐって何を考えるんだ？

それに、ベータテスターが一般プレイヤーを見捨てた？

馬鹿か？ここにベータテスターが作った、もしくは協力したと思えない冊子があるんだが？

これは無料で配られていたよな？

ここにある程度の情報は載っていたはずだが？

それに、何故ベータテスターがここでお前らに土下座しなければならないんだ？

簡単に情報が手に入るのに、それを怠ったやつと、現状生き残ってる奴に何故謝罪が必要なんだ？

そこら辺、納得できる理由はあるんだろ？

つか、そんなくだらない話をする為に集まったなら俺は帰るぞ。

ふざけた頭してるからって何言ってもいいと思うな。

どうすんだ？ディアベルさん、この話し続けるのか攻略会議に戻るのか。」

「…じゃあ攻略会議に戻る。」

ボスはHPバーが4本で、最後のバーになると武器が曲刀カテゴリーのタルワールに変わる。

倒した際の金は自動分配、経験値は倒したパーティのもの、アイテムは取得した人のもの。

そんな感じで攻略会議は終わった。

「ちよ、センパイ、なんであんな事言うんですか。

もう空気最悪だったじゃないですか。」

「いや、すまん。あのいがぐり頭があまりにもふぎけたこと言ってるからつい…な。」

「たしかにあの変な頭の人の発言もイラっとしましたけどっ!!」

「でも、まあスツキリしたっしょ。」

俺らはベータテスターじゃないけどイライラしてたべ!

ハチに論破されたあとのあのシバオウ?の顔最高だったべ」

いや誰だよシバオウ。柴犬の王様か?

「おう坊主、さつきは最高だったぜ。」

後ろからめっちゃガタイのいい外国のオッサンに肩を組まれた。

「いや、誰だよあんた。」

「俺はエギルつてもんだ。」

あの時、俺も反論してやろうと思ってたら、お前に全部言われちゃまってな。

めちやくちやスツキリしたぜ。ありがとな。」

「そうかい。」

俺はハチだ。よろしく。」

エギルと別れてからアスナと共にパーティでの連携等の練習をした。

アスナはずっとソロでやっていたようで、スイッチ等を知らなかったのだ。

それに、ソロでひたすらレベリングをしていたようで、食事も最低限の味無し黒パンばっか食べていたようで、それにつけるクリームやミルクを上げたら少しテンションあがっていたようだった。

俺たちが風呂、シャワー付きの宿で生活していると知ると、アスナがシャワーを貸して欲しいと頼んできたのだが、アスナが女性だときづいていなかったキリトが部屋に招こうとして、イロハにボロくそに説教を受けていて、皆で笑った。

さあ、ようやく来た、第1層フロアボス攻略日。

なんか行けそうな気がする！